



## ■ランチオンセミナー

### 田野畑村におけるお手伝い

司 会	喜多 祐荘 (元 東海大学健康科学部)
発 題	黒岩 誠 (明星大学総合健康センター・人文学部)
コメンテーター	廣池 利邦 (群馬医療福祉大学) 岩崎 弥生 (千葉大学看護学部)
ゲストスピーカー	久保 朋子 (田野畑村保健センター)

(喜多祐荘) 黒岩先生は長野生まれで東京育ちの臨床心理士です。早稲田大学在学中より、サークル思惟の森の会に入られまして、震災の被災地の一つである岩手県田野畑村で、毎年20日程活動をなさっておられました。今回の震災以降、本学会のMCRTに対応して、8月いっぱい現地に入り、活動をなさってこられました。さっそくそのご報告を伺いたいと思います。

(黒岩誠) 黒岩です。よろしく願いいたします。

#### I 田野畑村との縁

まず私が今回の活動の流れをお話致します。司会の喜多先生、コメンテーターの廣池先生、岩崎先生は、村の被災支援職員、特に医療関係などの専門職の方々をサポートして参りました。そして村の状況をご説明いただくために田野畑村保健センターの久保保健師にいらしていただきました。この夏、岩手県の田野畑村で一緒に活動した仲間がここに並んでおります。

私は40年ぶりに田野畑村をたずねました。学生時代、大学が村と契約を結んで植林活動をしておりました。思惟の森の会の学生たちは村

の人たちに教えられて植林をし、お宅に分宿して生活させていただいたという経緯です。学生の活動はずっと続いておりました、先般50周年を迎えました。私は初期の頃のメンバーです。OBの中には毎年行っている人までいますが、私は40年ぶりでした。このような縁で、この震災ではとにかく様子を見なければという、衝動だけで田野畑を訪ねてみまして、「これは大変だ」という状況を目の当たりにすることになります。ご紹介がありましたように日本精神衛生学会の企画として認められたこと、早稲田大学思惟の森の会OB会の田野畑への復興支援と関わったこと、明星大学のボランティア支援など各方面からのさまざまなご支援をいただくことで活動が実現いたしました。宿舎は木立に隔離されたような300坪ほどの敷地に立つ古い南部曲屋を移築した早稲田大学の寒立荘(写真①)を拠点として借りることができました。

#### II 田野畑村に固有の文化

田野畑村で何ができるかを考えてみても当初はどうしたらいいものかよく分かりませんでした。田野畑に特有の文化があり、これがコミュ



表 1 田野畑村の津波による被害（田野畑村の資料<sup>1)</sup>より）

地区名		被災前の世帯数	被災世帯数	うち住家再建見込数	左のうち高齢世帯数	残存世帯数
机	机	61	2	1		59
明戸	明戸	40	11	4		29
羅賀	羅賀	63	26	16	3	37
	平井賀	60	47	29	7	13
	上川原	36	30	14	3	6
	海鳴台	11				11
	小計	170	103	59	13	67
島越	松前沢	38	20	17	3	18
	川向	39	39	34	2	—
	大須賀	41	40	34	5	1
	島越	47	16	13	4	31
	島の沢	25	13	2	1	12
	小計	190	128	100	15	62
合計		461	244	164	28	217

ニティの結束を強固にし、自立への自信とプライドを作り上げ、外部への依存を極端に抑制しています。幕末に近い頃、三閉伊一揆と呼ばれる民衆の蜂起が田野畑を中核に起こりました。飢饉による飢餓もあったのですが、盛岡藩の悪政に「小〇」の旗を掲げた15,000人の農民が仙台藩への領地替えを求め、実現させました。相互扶助と自助を村は誇りとし、村の中心地の高台に一揆に関して民俗資料館を建設しています。この村の医療福祉関係施設はこの民俗資料館よりももう少し高い丘の上に集められ、今度の大災害で、停電で通信機能が麻痺した数日間、サンダルコミュニケーションと称して、ツツカケの上履きのまま、相互の施設の間を走り回り機能を維持しました。国や県の支援を待たずに村のコミュニティは自立し、ボランティアへの支援を求めることはしていません。大きな町の被災地に比べれば、どんどん復興は進み、一見通常の生活が戻りつつありそうでした。このような状況ではポジティブな側面としては自助の文化が強調され、ネガティブな側面としては抑制の文化が強調され、そのコントラストが非常に鮮明になったと感じています。

### Ⅲ コミュニティの現状

今度の災害を田野畑固有といっても言い過ぎにはならないだろうひとことで表現すると、田野畑という「コミュニティ依存の文化」の中で「津波という物理的な力でコミュニティが分断された」ということです。相互扶助的な背景の自助機能をもったコミュニティが壊れた時、抑制的な生活だけが残るという可能性がありました。相互扶助の機能は濃密なコミュニケーションに依存しているからです。

田野畑へは盛岡から今の段階だと2時間半くらいかかります。車では2時間、電車やバスで岩泉という町の小本という所まで行って、それから無料バスです。村の人たちは「とんでもない僻地だ。沖縄より遠い所だ」というふうに言ったりします。陸中海岸国立公園の真ん中で、非常に風光明媚で素晴らしいところです。

約4,000人の人口。45年前は6,500人位、過疎と高齢化が進んでいます。被災状況では、驚いたことに、震災での家屋の倒壊はありませんでした。津波による被災だけでした（表1）。陸中



海岸はリアス式で、200メートルの断崖を持つ台地です。そこに4本の沢が切り込まれていて、非常に狭く急峻な沢です。帰りに福島に寄ってみましたが、小名浜の浜は2メートル位の津波でザーッと何キロもが壊されています。ところが田野畑は30メートル近い津波が一気に押し寄せて、全ての物を流し去ったということです。

5月、最初の印象、車で台地から浜に降りた印象は非常に清らかでした。汚らしいものは一切なくなっていて磯の香りがしていました。福島の小名浜では生臭く腐った匂いが充満していました。ですから、本当に強烈な津波が来てすべてを流し去ってしまったのかということが分かります。

航空写真を見るとよく分かるのですが、3つの浜にカルボナーラ島の越とかカンパネルラ田野畑とか、鉄道の駅があり、そこが浜です。この電車の線路は切り込んだ浜以外は全部トンネル。だからトンネルを抜けると浜で、駅がある。その駅が全部流されてしまったというのが現状です。

被災状況は、4つの浜、机と明戸と羅賀と鳥越とですが、被災者も死者・行方不明あわせて約40名と他の都市部に比べて少ないと言えます。

5月の写真です(写真②)。鳥越という浜です。塔のような残骸があるだけです。製氷工場です。その隣に山が見えていますが、尾根の一番上の松が枯れています。あの高さまで津波が達し、製氷工場の一番上の屋根のあるところに、畳が1枚引っかかっています。

左手に見える一番上の家が、やっとなり、次の家は半壊です。その下にずーっとまだまだあるのですが、家はみんな流されていてあの半壊の家のあたりから道が高く上って行くような状況です。

シンボリックにエピソードを仕立てた三姉妹のお話をします(写真③)。一番上の家が長女の家。半壊が次女の家。流されてしまったのが三女の家。津波の時はみんな一番上までたどり着いて難を逃れてその当座は「良かった、助かった」というふうに感じます。しかし、私が田野畑に行った半年後の8月はそろそろ自分たちの

将来を考えなきゃいけない時期になっていました。被災の仕方によって、自宅が残ったのか、仮設住宅に入居するのか。立場による利害関係が全然違ってきます。

被災した浜のすべてのご家庭を訪問したのですが、この落差が非常に大きく反映してしまう。一番上に残った家の方はずっとそこに住んでいます。買い物もできない。悲惨な被災現場を見ないように窓を締め切って生活しています。家を流された人たちは、仮設住宅に入って、支援物資はいっぱい来る。仮設住宅に新品の自転車が20台ぐらい並んでいるのですが、他に融通することはできない。真ん中の半分壊れた家はどうかというと、直すか直さないかという判断を迫られています。お金が相当かかる。仮設住宅に入った人はこれを2年後まで先送りができる訳です。

7月の初旬に仮設住宅に200世帯が入居できました。田野畑ではなるべくコミュニティを維持する努力がされました。世帯がバラバラに入っただけではなくて、3つの仮設団地に集落ごとに上手くまとまっています。そういう意味でコミュニティをまとめる努力がなされています。

#### IV 田野畑に必要な支援とは

コミュニティの回復を皆が求めながら、誰も音頭をとる余裕がないというのが8月の現状でした。「よそ者」が介入してどうにかする必要があります。

私たちが心理臨床的に関わることの可能な方法は、すべての人々に均等なアプローチを行って住民同士の接触によって生まれる共通の話題を提供することと考えました。

田野畑ですべきことは、①まず、外部からの支援を受け入れることのためらいへの敷居を低くすること、②次に共通した話題を提供し以前のコミュニティで共有することによって共感や連帯の感情を安全なレベルで共有すること、の2点であると考えました。

私たちは8月に、すべてのコミュニティをテリトリーとしている保健センターの保健師のもとで働く形をとりました。田野畑は支援過疎地



です。岩手県に多様な支援が入ったことは報道されますが、何故か抜け落ちるポイントがあります。この代表的なのが田野畑村です。

9月下旬に復興計画ができ、11月22日に復興祈念祭が行われました。この日に被災者の方が1人自死なさいました。本当に、実は「始まった」と感じました。海の男は海に戻りたい。女は戻りたくない。これは生物学的な感覚だと思います。女は自分の子孫をきちんと残す。男は体を張って稼いでくる。そういう葛藤が被災した人たちの中でどうにもバランスを維持できなくなっています。

被災直後の状況が回復したということは被災以前の日常生活と今の日常生活の落差が明白になり、この落差に人々がどう対処するのかという課題が今始まったばかりということです。遠く離れて生活している私たちは、この物理的な災害が終わったような気がして、忘れかけています。8月の終わりに田野畑を離れるにあたって「2カ月後にインターネットを使ってカンファレンスをやりましょう。保健師さんのお仕事を支援しましょう」と久保さんと計画を立てました。保健師さんのお仕事を支援するという計画を立てましたが、実はやっておりません。言い訳をすれば、情動の嵐の海で1カ月漂っていたので、その後2カ月は軽いうつとさまざまな身体症状が出てしまって自分の日常生活を維持することで精一杯だったとは言えるのですが、日常生活に戻るといことはそういうことで、自分は1人日常生活に戻ってしまった。目に見えない被災地の生活を回避してしまったということでしょう。先延ばしにしたことは回復できません。田野畑では被災以前の日常と今の現実との落差の中での生活を強いられています。

## V 田野畑での実践

田野畑には久保保健師の他に保健師2名と栄養士1名がいらして、この方々とパートナーシップをうまく組むことができました。

私はコーディネーター。カウンセラーは若手30代の人たちが3泊4日の組み合わせで、同様に院生を1日1名か2名というような計31

日の配置具合です。「バラ作戦」と名づけました。

### 1. バラ作戦

週に1回水曜日、全戸にバラを配りました(写真④)。被災した方の仮設住宅は団地です。大変なのは集落に残った住宅の訪問です。点在しているからです。それを登ったり降りたりしながら配る。難しいのは、自前で借家を借りて住んでいる人たちが何人かいて、その人たちが抜け落ちてしまうのです。全被災者に同じ手当てをするというのがひとつの課題でしたので、それをやるのが大変な作業でした。

バラの花には毎回挨拶状をつけまして、「こんなふうに来てます。ご相談はこの電話番号で、よろしければ、宿舎にどうぞいらしてください」。3週目の挨拶状にはお食事会のご案内をいたしました(写真⑤)。バラは福島のパラ園<sup>注1)</sup>から特別な価格で送っていただきました。

### 2. ムーミン谷のお食事会

浜のお祭りの道具は津波で流されてしまったので、高台のコミュニティでも祭りは自粛されました。私たちのお食事会も祭りではなく、お食事会です。ムーミン谷のお食事会としました。

コミュニティが分断されて壊れているので、すでにご説明したように、残った人の利害と仮設住宅に入ってきた人たちの利害と、分散してしまった人たちの利害がずれたことと、物理的に引き離された結果、コミュニケーションが取れない状態にあります。

村主催のイベントで100名集めるのは大変だそうです。でも、集落のお祭りには全戸参加します。東北のコミュニティは実は国に対して、国民としての当然の権利への期待も持っていないように見えます。何があっても自分たちで全部まかなう、という体制をとっています。この災害が起こった時、この4,000人の村は自活していました。外から見たら何の問題もない。3分の2の被災しなかった方々が3分の1の被災した方々をすべての面で助けていました。支援がなくても何でもないかのように見えます。大きな町は支援がなければにっちもさっちもいかないのですが田野畑村はうまく行ってしまふ。保健師さんの職場、医療福祉関係私設での動き



表2 アンケート回答者の内訳および食事会参加率（居住地区別・居住形態別）

居住地区		自宅	仮設住宅	借家	合計
鳥越	回答した世帯数	35	60	0	95
	うち参加世帯 (%)	7 (20.0%)	17 (28.3%)	—	24 (25.3%)
羅賀	回答した世帯数	44	8	5	57
	うち参加世帯 (%)	8 (18.2%)	1 (12.5%)	1 (20.0%)	10 (17.6%)

も、先ほど説明したサンダルコミュニケーションでまかになったという状況で、一見何にも支援しなくてもいいというような雰囲気があり、支援体制も県や他の動きの町に比べてどんどん進んでいました。しかし、実は従来皮膚感覚的に安定を保っていた相互扶助的なシステムは破壊され、過剰抑制だけが残ってしまっていたと考えました。その対策としてのお食事会を考えました。「ムーミン谷のお食事会」です。

コミュニティのダイナミズムが機能しない場合、私たち、「よそ者」が外圧をかけてバランスを崩すことを考えました。もともと岩手は座敷童の国ですから「フィンランドの座敷童ムーミンが来たよ」というような感じで「私たちの宿舎の寒立荘、この摩訶不思議な空間にみんな集まってきて、日常を忘れちゃいましょう」とセットしました。たくさん来てくれました（写真⑥、⑦、⑧）。

100本ワインを並べておいて、「何本持っていてもいいですよ。何本飲んでもいいですよ。好き勝手にやってください」という設定です。

石窯は福島の煉瓦屋さん<sup>注2)</sup>が寄贈してくれました。これでピザを焼いたり大きな鍋でスパゲティを茹でたり、こんなようなことをしました（写真⑨、写真⑩）。

曲屋の白壁に本当に落書はできないのでストレッチボードを張りまわし、落書き用の壁にしました。アグレッシブな絵もありました（写真⑪）。

### 3. お食事会への評価

活動終了時にアンケートに答えていただきました。計164通。全世帯数で350世帯位でしたから、まあ半分程度の方が回答してくださっています。

アンケートを見ると浜ごとに、すなわちコ

表3 お食事会の感想（参加者、n = 34）

感想	%
うれしかった*	50.0
元気になった	50.0
心が和んだ	47.0
おもしろかった	38.2
癒された	29.4
ほっとした	26.5
満足感があった	26.5
気持ちがすっきりした	17.7
その他	17.7
気持ちがよかった	11.8
つまらなかった	0.0
気持ちが落ち込んだ	0.0
満足できなかった	0.0
不満がある	0.0

\*「うれしかった」は田野畑固有の意味として情緒的な意味を込めた総合的に「よかった」を表している。

コミュニティごとに文化があります。鳥越と羅賀が大きなコミュニティなのですが、気質は鳥越が活発で羅賀はおとなしいと言われています。浜の気風の違いは違う浜から嫁いだ女性が嫁ぎ先の気風に染まっていくと言われる程です。

お食事会にこのアンケートの中でどのくらいの方が参加してくれていたかというところ鳥越で25%、羅賀で17%（表2、表3）。お食事会は私たちの宿舎寒立荘でやりましたので。浜からはタクシーを借り上げて往復して来て頂きました。仮設住宅はどうか歩いて来られる距離ですが、車で来たりで、参加した人が2割方いただろうという感触です。600食用意しましたが450食消費しました。これから考えて大体200人くらいは来てくれたらだろうと考えています。



#### 4. バラ作戦への評価

コスモスがいっぱい咲いているので、裏のコスモスを1輪ずつ持っていけばどうだろうとも考えましたが、非日常性を醸したいと考えました。悲惨な現実にはファンタジーを挿入したいと考えました。1本のバラとはいいますが、1本のコスモスとは言いません。バラは1本で本当に花なんですね。それがアンケートに如実に示されました。どんなに大事にさせていただいたかということ、いちいち読む時間もないのでまとめて見ていただくと、こんな感じです(表4,表5)。

「1本のバラが置いてあってびっくりした」とか、私の持って行った、集落に残った70代のおばあちゃんは、「生まれて初めてバラをもらった。3月11日から初めて人が訪ねて来てくれた」と。今ここで起こっていることは何かというと、みんな同じに扱ってもらってなかつ

表4 バラ作戦の感想 (n = 164)

感想	%
うれしかった*	62.8
心が和んだ	61.6
癒された	39.6
気持ちがよかった	17.1
ほっとした	11.6
元気になった	11.0
気持ちがすっきりした	8.0
おもしろかった	6.1
その他	6.1
満足感があつた	5.5
つまらなかった	0.0
気持ちが落ち込んだ	0.0
満足できなかった	0.0
不満がある	0.0

\*「うれしかった」は田野畑固有の意味として情緒的な意味を含めた総合的に「よかった」を表している。

表5 食事会アンケートの自由回答 (抜粋)

自宅 女性	避難所から被災地に戻って毎日波の音を聞いて、瓦礫を砕く重機の音で寂しくて、夜も眠れず何度も目が覚め、涙もしました。……(略)……がむしゃらに毎日働き、悲しみを忘れようと思いました。そんな時、バイト先から家に戻ったら1本のバラと震災お見舞いの用紙があり、嬉しくて涙があふれました。相談専用の電話へ何度も電話しようと思ったけど、勇気が出ませんでした。……(略)
仮設住宅 女性	震災後約2ヶ月半、集団生活。生きていることが喜びなのか、苦しみなのか、頭の中は真っ白でした。元気で仮設住宅に入居することを目標に皆さんと共にここまでできました。入居できてからも様々な問題があり、気の休まる日はありませんでした。その中、一輪のバラの花が届いていました。「えっ、この世にこんなきれいな花があったのか」、花のことも、おしゃべり、テレビを見ることも忘れた毎日でした。……(略)
自宅 女性	1本目のバラ…手に持っていることが不思議でした。できるだけ長い期間、咲かせたいと思い、根が付くように祈りながら植えてみましたが、残念でした。 2本目のバラ…今も美しいです。きっと枯れても、いつまでもやさしく心のこもった花は思い出の花として残ると思います。 3本目のバラ…2本目のバラと一緒に活けました。香りはありませんが、台所が明るくなりました。トゲのないバラに1日3回声をかけてから食事しました。 4本目のバラ…若い人からピンクのバラをいただきました。東京の話も少しできました。……(略)
仮設住宅 女性	お食事会に、同じ仮設住宅の方を誘って参加させていただきました。あの日以来、同じ地区だった人々と離れ離れになったままでしたが、久しぶりに会うことができ、話もはずみ、とても楽しい時間を過ごすことができました。子どもたちも楽しそうに遊んでいて、今の自分にとってムーミン谷での時間は、別な世界に来たような不思議な気持ちになれた時間でした。……(略)
自宅 女性	嬉しかった嬉しかった気持ちを忘れないために、いただいたバラの花を挿し木にしています。幸い私の家は被害を逃れましたが、家をなくした人、家族を亡くされた人たちはこれから本当のつらさが来るのではないかと心配しています。 田野畑のことを心配いただき、大変なことだったと思います。感謝します。来年の今頃、被災者の人たちがどうしているか訪ねていただければ幸いです。



たという現実があって、それに対して自分たちの欲求不満という場所もないというような状況が起こってありました。

バラの花は花瓶と一緒に届けました。差し上げた花瓶はシャンプーの補充用の容器のような機能です。ペタッとたためるのですが、広げて水を入れればちゃんと立っている。これがなかなか良かったですね。

その花瓶で漁師の男が生き返ります。「何の用だ」なんていう感じなんですけど、実はテレなんです。その花瓶をもらう。「おお！ こりゃいい」なんていう感じでニコニコして貰ってくれたっていう感じです。

## 5. 人々との距離感

4回花を配りました。当たり前ではあるのですが、不思議な感覚がありました。1回行く度にだんだん被災者の方々と近づいていきます。

最初は「何それ」と、まあ受け入れてくれます。「どうして持ってくるの」に変わり、最後になると「お前らに俺らの本当の気持ちが分かるのか」って言いながらしゃべり出します。メンバーは3泊4日で代わっているのだから、配っている度にみんな初めての体験をしています。被災者の方々はバラを通して、持ってきた後ろにいる人間は毎回来てくれているような気持ちになっています。人と行為との距離感が人と人の間に反映されているのです。

4回目の花を配ったメンバーは、初めての対応で生の情動が最初から表出されて、どうにか受け止めてはいるものの、ほうほうの体で宿舎に戻りました。

これが活動の概要です。いま、私たちは田野畑に火を点けてしまいました。これからどう展開すべきかを決め、実行します。本当に始まったばかりだと考えております。

それでは、久保保健師から見た田野畑の現状をお話させていただきます。

(久保朋子) はい、田野畑から参りました。保健師の久保です。どうぞよろしくお願いたします。

ここにいらっしゃる先生方のおかげで佐賀ま

で来られたなあと、本当に感謝しておりますが、この席はちょっと緊張しております。

どう変わったかというお話ですけれども、私たちはすごく、何と言ったらいいのでしょうか、自殺に関して「こういうことが起きるんじゃないか」というのは、色んな報道がされているので、「まああるんだろうな、でもどこかよその問題みたい」なところがありました。先生が「いやそうじゃないんだ。こういうことなんだ」といろいろとお話してくださって、それがちょっと身近に感じてきたかなといったところでも、運よく自殺はわずかしかなかった。訪問してお話を聞いて歩いていると、ワッと泣いたりとか「人に会いたくない」と鍵かけて居留守しているとか、そういうのは仮設に住む人にちらほらあります。私たちはそういう人たちに注意を払い、ちょっと気になる人として全部把握していたつもりなのですが、実際このようなことが起きると「1回吐き出して終わらんんじゃないんだなあ」と、「その時は死にたいと思っていない人もこれから先ずっとどこまで続くか分からない。こういう心の変化でいろいろなことが起きてくる。本当に今からが始まりなんだなあ」というように感じております。生活はすごく落ち着いてきました。支援物資であふれかえっています。狭い仮設に冷蔵庫が2つも3つも来ることがあったり、今は暖房器具がたくさん送られてきますけれども1つしか入りません。こたつかファンヒーターかカーペットかどれか1つしか入らないんですね。みんな入るような広さがありません。物資もあふれて生活も落ち着いて、みんな何食わぬ感じで隣近所で話をしたり落ち着いているかのように見えます。でもこれからが心のほうは始まりなんだなあと本当につくづく思う今日この頃です。

田野畑村では季節的に色んなお祭りがありました。牛乳、酪農が有名で牛乳祭りとか、夏のお祭りというのは海の祭りです。海の神様を祭るのが旧暦で6月何日と決まっています、それに合わせてすべての浜で、海はお祭りです。8月はお盆で、盆踊りですが、それぞれの地域でそういったお祭りを全部やめました。自主的



にやめてるんです。行政が「やめろ」と言ったのではないのに、みんなやめてました。

そのような状況で、段々年の瀬が近づき、「ここで全部のお祭りをまとめて復興祈念祭というのをやりませんか」というお話が出まして、村を挙げてやることになりました。

ただ、行政の中にも祭りとか人が集まってその非日常的な大きなイベントをやっていく気持ちについて来るだろうかと、そういう不安があったと思います。

**(黒岩)** こういうような状況です。まだまだ語りたことはいっぱいあると思いますが、時間があまりありませんのでお返しいたします。ありがとうございます。

**(喜多)** 黒岩先生、久保保健師さん、語りたことがまだたくさんあることはひしひしと伝わってくるのですけれども、時間の関係で今日は報告の1回目ということで、また次回、来年の今頃でしょうか、こういう発表と皆様への報告の機会を学会が持っていただければありがたいと思っております。

そこで、田野畑村の福祉・保健関係の職員の勉強会に加わせていただきました、私を含めて3名。これも黒岩先生、久保保健師さんのあたたかい受け入れ態勢によって入らせていただいたんですが、その時に入らせていただいた先生方からコメントをいただきたいと思います。

岩崎先生は被災後の精神的ケアということで職員の方々に勉強会でお話をさせていただいた次第です。どうぞ先生お願いいたします。

**(岩崎弥生)** 岩崎と申します。今日は自分の活動について発表はせずに、黒岩先生たちの活動にコメントいたします。実はですね、私どもは先程話にも出ていました復興祈念祭が終わった翌日にもう一度、喜多先生、廣池先生、私の三人道中で、田野畑村にお邪魔いたしました。

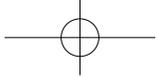
そしてその時に、黒岩先生がなさったことの意味というのを、村の人たちがしっかりと受け止めていらしていることを強く感じました。黒岩先生は、平等にやるという事は難しいというようなお話も少し最後のほうになさったと思うのですけれど、黒岩先生たちは実は仮設住宅に

入居された方たちだけではなく、被災地に残っていらっしゃる方たちのところに入り込んで、坂を上り下りしながら被災者のお宅を一軒一軒訪ねていかれるっていう事をなさっていました。また、ピザパーティーのときも、タクシーを借り上げて被災者を迎えに行き、食事会に出ていただいたっていう活動もなさっていました。それらが村の方たちにしっかりと受けとめられていたんですね。

二度目の訪問時に、「あのバラが本当に良かったよね」って、お会いする方たちどなたたちからも言われて、「ああ、あの黒岩先生のグループね」っていう感じで私たちを迎えてくださいました。実は私たちは黒岩先生のグループに入って活動したわけではなく、黒岩先生にかこつけて田野畑村にお邪魔しただけなんですけれど。ですから、あのバラの意味を考えると、村の方たちには、とても大きな命の光っていう感じで、明るいついていけるのかな、そういう感じで残っていらっしゃるのかなって思いました。

一人の方が自死なさったのは、村の方たちにとっても、とてもショックだったでしょうし、特に黒岩先生と、それから一緒に活動なさっていた学生さんたちにとっては、とても重いことなのかなって思うんですけど、バラに支えられてまだ頑張っている方たちがたくさんいらっしゃるということをお伝えしたいと思います。

それから、田野畑村に二度伺わせていただいて、村の方達の力がすばらしいと思いました。自助努力と申しましょうか、本当に自分たちで自分たちの村を救済していく、ということが行われていました。復旧、復興していくところでは、まさに自分で律し、そして自分で立つという形で村の方たちが動いているなという事を大きく印象付けられました。その中でも素晴らしい活動が、仮設における、各地区から選出された女性の相談員による活動です。女性相談員が2名ずつ仮設の集会場に配属されていて、その方たちが村の人たちと談笑の場を作ったりとかですね、子供たちが訪ねてくる場を提供したり、あるいはおしゃべりをしたり、相談



をするという事をやっていたらしたんですね。やはりこれからはこうした大きな災害では長期ケアがとっても大事になってくると思うんですけど、この長期的なケアで被災者の身近なところにいる人たち、そして同じ経験をした——まあ、被害の状況には大きな差があるんですけど——被災の経験を分かち合える人、その方たちは、ある一定の期間継続して支援できるという意味では、非常に素晴らしい取り組みだなあと思いました。

ただですね、多分これからアウトリーチというか、被災地区に残された方たちをどうサポートするかということが、大きな課題かなと思います。そういうところに関して私ども、喜多先生、廣池先生と私の三人がやりたいのは被災地域で支援している方たちの支援なので、地域のお邪魔になりながらも被災地域で支援している地域の方たちの力になれたらいいかなあ、ということでこれからもやってまいりたいと思います。コメントにならないですけど、以上で私のお話を終わりにします。

**(喜多)** ありがとうございます。それでは、つぎに廣池先生お願いいたします。

**(廣池利邦)** 廣池でございます。

三人で田野畑村を訪れたのは8月のお盆の後でした。

黒岩先生のご案内で、海岸を全部車でもって一緒に回らせていただき、ただただ言葉もなく見続けるだけでした。私は、実は田野畑村に行くという話が出た時に、地域社会の研究を非常に長くしていたものですから、震災に遭った地域がどうなっているのかということを知りたくて参加致しました。というのも、この地域は明治時代と昭和の初期に大津波に遭い、それぞれの津波で3,000人、計6,000の方が亡くなったのです。お気の毒なことですが、今回の津波で亡くなった方、行方不明の方が約40人ということで、その数字の極端な落差に関心をもって先生方と一緒にすることに致しました。そして、行っていろいろお話を伺っていくと、地域社会が非常に強かったということと、何か現在の日本で失われている、つまり1950年代

から失われているはずの地域社会というものの存在を、田野畑村に見てしまったのです。そのためにどうしてももう一回行きたい、ということで11月に再度お邪魔したわけです。

また来年もお邪魔しようという話が進んでおりますが、あそこの村では本当の地域社会教育、あるいはコミュニティがあったなと感じました。新しいマスコミの力で碎けそうになった地域を、「バラ」が救ってくれたという黒岩先生のご努力というか活動に対して、私は心より敬意を表したいと思うとともに、日本の地域がまんざら弱くないな、いやどちらかといえば強いなと感じました。そして11月に再訪した日の前日に復興祈念祭というのがあったのですが、地域に直結する道路建設の起工式のようなこともあったようです。これは何かのカモフラージュだな、復興祭は早すぎるなと思った方もいらしたようでした。とにかく今の時期は海の仕事を奪われた方のために“漁業への支援”が必要なのであって、“道路”ではないのではないかと話でした。私も全く同感です。

昔から大津波のあった地域であるにもかかわらずその村が残っていて、しかもそれが海拔200メートルのところにある。地名は机（つくえ）というどうみても農業だと思えない村が、実は漁村だったという話を聞いて再び驚きました。いざと言う時は200メートルの高さまで船を持ち帰るということをしながらか漁業をしていたのです。つまり近代化や便利さが必ずしも幸せをもたらさないかもしれない、とよく口で言いますが、実際に行ってみて、話を聞いて実感したところです。

これからの地域はいかにあるべきか、ということを私たちは発信していかなければいけないと思い、職員研修会でいろいろと話をさせていただきました。その時のテーマが「地域復活のための民族学的アプローチ」でしたから、いろいろと話をしていくうちに、福祉施設の事務長さんが、ここにいる高齢者さんの話を聞き出そうということになり、ご協力をいただくことになりました。これから長期的に高齢者の言い残した言葉を集めていくことになりそうです。確



かに田野畑村の高齢者の残した過去史を見ると、過去の津波の前にはイワシが異常に豊漁だったという記録があります。ご案内いただいた黒岩先生から耳にしたことですが、大震災の前年に松茸が大豊作だったそうで、その時に村の長老が「何かあるに違いない」と呟いたそうです。

時には老人ホームにいる方たちの情報というのを集める能力が重要だと感じました。というのも、たまたま現在介護の記録について教鞭をとっているものですから、そういう視点からも見てみたい村だと思いました。また来年も行って、何かお役に立てればなと思ひながら、地道な活動を続けていこうと考えております。

大変雑駁な話でしたがご報告させていただきました。

どうもありがとうございました。

**(喜多)** ありがとうございます。それでは久保保健師さん、もう一言お願いいたします。

**(久保)** 本当に田野畑村でこういった活動をしていただくことで外との交流が持て、そして専門の方々と私たちが交流することができたというのはすごく大きなチャンスだと思います。遠慮、遠慮と東北の方は黙っていることが美德みたいところがありますけれども、ここは先生方の力を借りて「自分たちが本当に困っていることはこういうことなんだ」ということで発信していきながらこれからも支援をしていただくような交流をして続けていきたいなと私たちは思っておりますので、今後ともよろしく願ひします。

**(喜多)** ありがとうございます。それでは全体の締めとして黒岩先生から願ひします。

**(黒岩)** 「本当に始まったな」という実感です。「終わったな」ではなく。

これが1年で済む訳ないですよ。2年で済むかな、2年でも済まないですよ。

そうすると、どうしたらいいかということです。田野畑村というのは本当に岩手の中でもスポイルされてしまっています。だから情報も入らないというような状況があるんです。そこにダイレクトに東京からパイプをつないでしまお

う。国の目の届かないところを私たち、自分たちでやっつけてしまおうと考えています。

それはもう細々としたものでもいいという気がしております、本学会の皆様方に、ご支援、というよりも御自分たちでどうぞ参加してやっていただきたいなというふうと考えております。どうぞよろしく願ひいたします。

**(喜多)** 大変短い時間の中、貴重な報告をいただきましたましてありがとうございます。今後も学会の活動の一環として、継続していきますので皆様の温かいご支援をよろしく願ひいたします。

最後になりますが、この黒岩先生の8月いっばいの滞在訪問を中心として、私たち3人が加えさせていただきまされたのも、本学会の高塚理事長および理事会の強い御支援、財政的そして組織的な支援があったという背景があります。学会、理事会に感謝を申し上げます。皆様聞いていただきまして大変ありがとうございました。

## 追補：その後

私たちはこの報告以降も田野畑での活動を続けております。田野畑村保健センターの保健師の方々のお力を借りて、「バラ作戦」を継続しています。クリスマス・お正月には相談電話を開設し、バラの絵の入ったメッセージカード「バラのご挨拶」をお届けしました。2012.3.11には同様のメッセージと一緒に20ページほどの詩集 鈴木真一著「田野畑村への11篇」を被災地だけではなく田野畑全村にお届けしました。田野畑をメンタルヘルスに関して情報の過疎地として捉え、田野畑と東京都の間にメンタルヘルスに関するパイプラインを敷設しようとしています。心理臨床の専門家集団が無理のない形で東京に特定の時間、相談窓口としての電話を開放し、村民あるいは保健師をはじめとする対人関係専門職の方々を常態的に支援するシステムを作ろうと考えております。(文責:黒岩)

私たち(喜多・廣池・岩崎)も、2012年度に田野畑村を直接訪問し、支援者(相談員など)が村人と語らって「村の自然・災害・団結・村



人の伝承・行事・絆」を共有し（心をつなげる）  
お手伝いを考えています。（文責：喜多）

<http://www.vill.tanohata.iwate.jp/userfile/hukkoukihonnkeikakuhonnunn.pdf>

文 献

- 1) 田野畑村：東日本大震災田野畑村災害復興計画 復興基本計画，p.9, 2011.

注1：ここにこバラ園 〒962-0822 福島県須賀川市東作57-8

注2：株式会社 磐城シャモット 〒970-8026 福島県いわき市平字旧城跡12



写真①



写真②



写真③



写真④



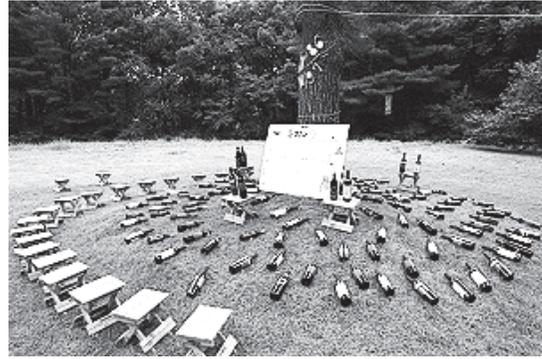
写真⑤



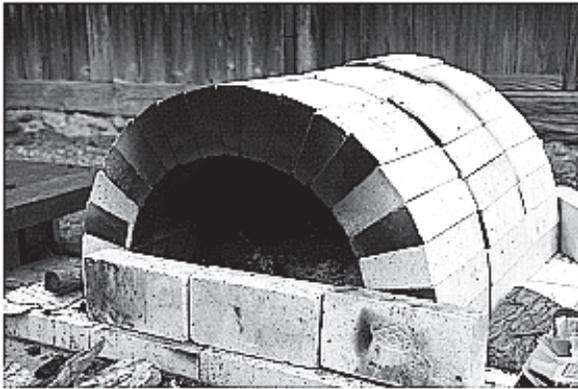
写真⑥



写真⑦



写真⑧



写真⑨



写真⑩



写真⑪